

月経前症候群の精神症状に対する 漢方治療

宇津野レディスクリニック 院長 宇津野 栄

キーワード

- 月経前症候群
- 加味逍遙散
- 抑肝散加陳皮半夏
- 精神症状

月経前症候群(PMS)は女性の半数以上が経験するといわれる。その症状は多岐にわたり、個々の患者の症状に応じた随証治療が必要となる。西洋医学的治療であるホルモン補充療法実施、選択的セロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)や抗不安薬投与の他、加味逍遙散及び抑肝散加陳皮半夏等による漢方治療も有用である。ここでは両剤の有用性を典型的に示す2症例を紹介し、PMSに対する適切な治療の確立への一助としたい。

はじめに

月経前症候群(Premenstrual syndrome、以下PMS)は月経周期の黄体期に発生し、月経の開始数日後で消失する精神的・身体的症状である。多くは月経周期のたびに繰り返し発生する¹⁾。日本産科婦人科学会では「月経前3～10日の間続く精神的あるいは身体的症状で、月経発来とともに減退ないし消失するもの」と定義している。その頻度は全女性の50～80%との報告があり、症状は200～300ともいわれており、中でも、身体症状としては、腹痛、乳房緊満感、腰痛、頭痛・頭重感など、精神症状としては、イライラ感、易怒性、眠気、抑うつ感などが多く報告されている²⁾。PMSは実に多彩な症状を呈するため、画一的な治療はなく、患者個々の症状にあわせて治療する必要がある。薬物治療としては、低用量ピル(Oral Contraceptive、以下OC)や選択的セロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)、抗不安薬、漢方薬などが症状に応じて適宜使用されている。

当院では、PMSの薬物治療として、まずは漢方薬の使用を試みている。近頃では患者が自身の症状や薬剤に対して積極的に情報収集していることも多く、ホルモン補充療法(HRT)などについては、OCの使用が普及したとはいえ、いまだ副作用への不安がぬぐえぬ患者もみられる。漢方薬でも副作用は起こりうるが、OCに比べて発現が比較的少ないため、患者の受け入れがよく、また、一剤で多くの症状に奏効することからも、更年期障害やPMSなどは特に漢方薬が有用であると考えている。今回、PMSの精神症状に対して漢方薬が有用であった症例を報告する。

症 例

■気分の落ちこみに加味逍遙散

43歳、主婦、154cm、46kg、月経不順

主 訴：月経不順、抑うつ気分

現病歴：2年程前より月経前になると気分の落ちこみが激しく、人前に出るのがつらい。また、家事をする気も全くおきない。首から上のホットフラッシュと膝下に冷えがあり、胃痛および便秘傾向が認められた。

経 過：ホルモン検査にてE₂の低下、FSH、LHの上昇があり、更年期障害も考えHRTを提案したが、副作用を心配し、本人より漢方治療を希望された。診察中も暗く落ちこんだ感じがあり、ホットフラッシュなど更年期様症状に膝下の冷えといった冷えのほせもみられたため加味逍遙散(6.0g分2)を1ヵ月間投与した。まずは抑うつ気分に対し効果がみられたため、処方を継続したところ2～3ヵ月後には他の不定愁訴に対しても徐々に効果が現れ、人前でも気が楽になり、以前より外出しやすくなった。月経不順(不正出血を含む)に関してはあまり症状の改善を認めず、不正出血時に中用量ピルを併用することで月経をコントロールし、現在に至る。

■イライラ感に抑肝散加陳皮半夏

29歳、会社員、164cm、60kg、月経順調(28日周期)

主 訴：月経前の脱力感、イライラ感、体のだるさ、不眠

現病歴：1年程前より月経前に手足に力が入らない程の脱力感、イライラ感、体のだるさ、不眠を感じるようになった。最近では特に月経1週間前からのイライラ感が強く、仕事に支障が出てくるように

なった。

経過：OCも提案したが、挙児希望があり、漢方治療を開始した。色白でぼっちゃんとした感じ、腹力はやや軟、イライラ感が特に強いこともあり、抑肝散加陳皮半夏(7.5g分2)を投与した。来院時が月経2週間前であったため、まずは2週間投与し様子をみたところ、不定愁訴の中でも特にイライラ感に対し効果がみられた。投与を継続し、3ヵ月後には脱力感や不眠なども解消されはじめ、仕事が順調にこなせるようになった。現在も投与継続中である。

方剤鑑別

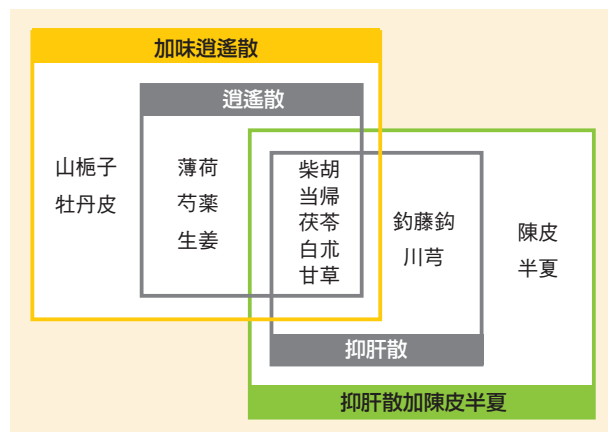
PMSは気・血の滞りに加え、黄体ホルモンによる頭痛やむくみなどの水滯症状が重なった状態と考えられる。症状により駆瘀血剤や利水剤、理気剤といった様々な方剤が用いられる。特に精神症状には「気」のめぐりを改善することが重要と考えられ、「肝」の機能を改善する方剤が応用されている。

加味逍遙散は、『和剤局方』に記載された「逍遙散」に牡丹皮と山梔子を加えた方剤で、肝気の流れが停滞して鬱積することにより生じる憂うつ感、イライラ、ほてりなどの症状改善(疏肝解鬱)を主とし、補血・健脾利水も併せ持つものである³⁾。産婦人科領域で広く用いられ、ホットフラッシュ、動悸、発汗、めまい、頭痛、肩こり、便秘傾向などの身体症状や抑うつ気分、不安感、焦燥感、易怒性、不眠(特に熟眠障害)などの精神神経症状を目標として使用される⁴⁾。

一方、抑肝散加陳皮半夏は、『保嬰撮要』に記載された「抑肝散」に陳皮と半夏を加えた方剤で、肝気が高ぶることにより生じるふらつき、手足のふるえなど(肝陽化風)の改善(熄風)を主とし、利水と化痰の効能もそなえている⁵⁾。抑肝散は、本来、小児の夜泣きや疳の虫などを目的に創案された方剤で、神経症で刺激症状が激しく、一般に癇が強いといわれている肝気の高ぶりによる興奮を抑え、鎮静させることから名づけられたといわれている。現在では、抑肝散および抑肝散加陳皮半夏は、イライラや興奮しやすいなどの神経の高ぶりを目標とし、年齢を問わず様々な精神神経症状に用いられている⁶⁾。

加味逍遙散と抑肝散加陳皮半夏は、ともに「肝」に帰属する方剤であり、PMSの精神症状に効果があると考えられる。構成生薬のうち5つの生薬が共通し(図)、焦燥感が強いなど類似した症状もあるが、ベース方剤の鑑別として、和田東郭『蕉窓雑話』には「抑肝散は亢ぶるに対して抑と云いたるもの也。故に其の症、目さえて寝られず、或いは性急にして多

図 加味逍遙散および抑肝散加陳皮半夏の構成生薬



く怒るなどのことあり。薬品も肝気を疏ずる故、抑肝のことに成るなり。逍遙散は右の場合ほどには亢ぶらず、鬱してあるところ故、ただ黙々としておる者なり。」との記載がある。PMSの精神症状にあてはめてみると、とくに抑うつ的で「落ちこみやすい」タイプには加味逍遙散、易怒性が強く攻撃的な、いわゆる「キレやすい」タイプには抑肝散加陳皮半夏を用いると、より奏効すると考えられる(表)。

表 処方のポイント

処方名	特長	帰属	分類
加味逍遙散	抑うつ的で「落ちこみやすい」タイプ 抑うつ気分、不安感、焦燥感、易怒性、不眠など	肝	駆瘀血剤
抑肝散加陳皮半夏	易怒性が強く攻撃的な「キレやすい」タイプ イライラ、興奮しやすい、焦燥感、易怒性、不眠など		平肝熄風剤

まとめ

PMSの精神症状に対する漢方治療は、PMSが多愁訴であるため、方剤の選択には苦慮することもあるが、問診により主訴を明確にしていくことで、より患者にあった方剤を選択できると考えられる。また、PMSへの治療では長期服用になることもあるが、患者とのコミュニケーションをとることでコンプライアンスの向上に努めている。

【参考文献】

- 1) 産婦人科研修の必修知識2011 (社)日本産科婦人科学会: p421-422, 2011.
- 2) 長塚正晃: 日本産科婦人科学会雑誌 61(12): pN657-663, 2009.
- 3) 安井廣迪: 臨床応用漢方処方ガイド: p30-31, 2004.
- 4) 稲木一元: 漢方診療 13(12): p11-16, 1994.
- 5) 森雄材: 図説 漢方処方の構成と適用ーエキス剤による中医診療ー: p232-233, 医歯薬出版株式会社, 1985.
- 6) 稲木一元: 漢方診療 16(3): p7-10, 1997.